巻　頭　言

研究しましょう

院長　平岡　眞寛

当センターの学術活動を更に強化したいと着任以来繰り返し発信している。

何故か？その第一の理由は、学術活動は自らを成長させるからである。日常の医療業務の中で疑問を感じたことについてデータを集積し解析する、他の報告を調査して、その結果も参考に結論を導く。好みの問題もあるだろうが、ワクワク感を味わう人も少なくないと思う。何よりもその過程で多くのことを修得する。新しい情報が入ってくるであろうし、統計手法などのスキルアップが図れるかもしれない。自分の立ち位置、役割、目標が見えてくる。ネット上には数多くの情報が流れており、研究しなくても情報は得られるが、目的があって得る情報とはその重みが異なる。この研究によって得られたものは大きな財産となる。

研究を支援するために当センターとしては、文科省科学研究費の申請資格の収得、CLiP（京都大学大学院医学研究科・社会医学系専攻における臨床研究・研究者養成プログラム）支援などを行っている。後者では、昨年度の一期生 10 名が全員 1 年間のコースを修了した。引き続き、院内から選抜された二期生 9 名が受講している。CLiP で得たものを実践に展開すべく、修了生が当センターの臨床研究の推進役を担って欲しいと思う。CLiP の指導教授である京都大学の中山健夫教授並びに教室員を講師にお招きして、セミナーなどで研究の支援も行っている。

昨年開設した東京医療保健大学和歌山看護学部に大学院が発足する。京都大学大学院医学研究科、和歌山県立医科大学大学院に加えて、大学院教育・研究の機会が更に増えてくるのは喜ばしい。社会人を対象にしたプログラムも少なくないことも有難いことである。

長い人生の中で、ゆったりと研究に没頭する贅沢を味わって欲しいと願っている。研究に必要な手技の取得に始まり、どのようなことを明らかにするか（研究仮説の設定）、データの収得・まとめ、研究成果の優位性・独自性の評価、論文執筆と進んでいく。自然に学位に繋がっていく。未知のことに挑戦するわけだから論文に至らず学位が得られないこともある。それでも、研究を通して物事の見方が広がり、人生を豊かにする。論文を批判的に読むことができ、論文の書き方も身につくことは、医療人としてのキャリアップに間違いなく繋がる。

昨今の医療を取り巻く環境、若手医師の価値観などが関係してか専門医志向が強く、その一方で、大学院への関心が低下している。研究の重要性は決して低下していない。昨年、ノーベル生理・医学賞を受賞した本庶　佑京都大学特任教授の免疫チェックポイント阻害剤の開発は研究の凄さ、インパクトの大きさをまざまざと見せつけた。本庶教授がいくつか示唆に富む発言をしている。その一つが、「教科書を信じてはいけない」。間違ったことがいっぱい書かれている、と述べ、実際、がん免疫に関する教科書を書き換える業績を成し遂げた。教科書が間違いだらけなら、ガイドラインは嘘八百そのものと言うと言い過ぎだろうか？確固としたエビデンスに基づくガイドラインは決して多くなく、今後もガイドラインは頻回に改定されるものと思われる。当センターの臨床研究が花開き、ガイドラインに反映されるような臨床エビデンスが創出されることを祈っている。